

ひとつの教えから

～モノづくり、人づくり、街育て

桐本泰一

輪島朴木地工芸桐本木工所・代表補佐 / ギャラリーわいち・代表

1985年 筑波大学芸術専門学群生産デザインコース卒業

デザインの解釈

私は石川県輪島市にて、漆塗りを前提とした木地製造業「朴木地屋(ほうきじや)」^{*1}を営んでいます。約10年前より、木地師、塗師、蒔絵師といった主に同世代の職人さんとともに使うための漆の器、家具、さらには建築造作への提案も手がけています。大学入学直後に受けた講義のなかに「デザインとは、ヒトの生活の質をより高め、気持ちのよい方向に向かわせるために考える行為で、その結果生まれたものがデザインされたもの。」と学びました。全くデザインと言う概念がなかった私にとって、一番印象深い内容でした。この意味を私は「自分が生まれ育った地域から生みだされている漆器を、この世の中に再度広めることが、私にとってのデザインの実践になるのではないか」と解釈したのです。ここでは私が大学で受けたひとつの教えがどのような動きに繋がっているのかを具体的に紹介した

いと思います。

^{*1}: 朴木地は器、花台、卓、膳などの中で、猫足、サギ足などの木を割ることによって作られる複雑な形状を得意としています。使用木材は朴、アテ、ヒバ、ヒノキ等。

漆の良さを伝えたい

漆器とは木などを加工した素地に、漆の木の樹液を塗り重ねて作ります。木や漆をはじめ、自然からの恵みを使い、多くの職人さんが製作に携わります。製作する時にも、木のヘラや女性の髪から作られる刷毛など、手作りの道具を大切に使います。少々



写真1：四方片口 / デザイン：桐本泰一

手間はかかりますが、丈夫で長持ちします。使い込んで傷ついても、丁寧な塗りが施されていれば塗り直せるのです。その塗膜の表情は「ふっくら」「しっとり」「深み」といった言葉に表現されることがあります。実際、手にとって口を付けてみますとわかりますが、漆器は手に馴染み、唇には柔らかく、見る目にも美しく、ヒトの感性を豊かにしてくれます。

モノが氾濫して、人の生活はとても便利になったと言われます。しかし、便利さと効率ばかりを追った結果、現代人が疲れを感じているのも事実です。そして今、迫りくる環境問題に慌てて対処しているのではないのでしょうか。木を素地として使い、漆を塗る漆器づくりは、環境にやさしい無公害のモノづくりなのです。しかし、私は使い手の方々と接するたびに「扱いが面倒」「かぶれるのではないか?」「価格が高い」等、漆器の良さが伝わらず、欠点らしき所ばかりが強調されているように感じています。何とか私たち作り手からこうした誤解を解いて、少しでも漆器を今の生活に再び馴染ませたいと思っていますのです。

いくつかの取り組み

平成6～10年にかけて輪島塗産地の20～40歳代の若手後継者が中心となって商品開発研究会、うるしPR事業、産地活性化セミ

ナー事業などが開催されました。私は招聘した商品プランナー、デザイナーと産地を結ぶコーディネーターとして依頼を受け、産地全体に参加を呼びかけました。「塗師屋(ぬしや)」^{*2}だけでなく、木地屋から蒔絵師にいたる八職の男女にも参加者を募りスタートしたのです。「漆とくらす」をテーマとして、どうしたら生活の中に漆器が蘇るかをディスカッションし、手を動かしながらモノを作り出すアクションを繰り返しました。産地の地盤固めにある一石を投じることが出来たのではないかと感じています。

各事業で学んだ事を実践しているメンバーのなかには、自らの潜んだ能力を開花させた事によってデザイン事務所を開設した元蒔絵師がいます。彼は観光分野などのPR事業へも実力を発揮しています。また、木地屋、塗師とのオリジナル製品の開発がうまく運び、この時期に販売をのばした若手塗師屋夫婦もいます。ある女性グループは、テーブルコーディネート勉強会、地域での漆器活用企画などを繰り返し、都市部で開催される企画展に自らの成果製品を活発に提案しています。

^{*2}：木地四業種、塗師、蒔絵、沈金、呂色と八職と呼ばれる職人分野が存在します。それら職人衆をプロデュースするのが塗師屋と呼ばれる漆器製造販売の親方衆なのです。

うるしはともだち「ギャラリーわいち」。

かつてない不況に見舞われている輪島塗産地は混迷を深めています。そんな中、私が代表を務める「ギャラリーわいち」設立は、輪島の朝市が立てられる本町商店街と重蔵神社の間にある「わいち商店街」(輪島で一番になろう、和を大切にしようの意味)の空き店舗活用依頼を受けることから始まりました。(平成12年)ひとつの漆塗り技法にとらわれることなく自由な創作の発表の場を持ちたい、漆器の良さを使い手に伝えたい、人のつながりを深めたい、元気な街を創りたい、などの思いを込めて、木地師・木地屋が三人、塗師が二人、塗りから蒔絵までこなす漆芸家が四人の九名が参加したのです。

私たちが基本設計した店舗は、床には柔らかな優しい大谷石、壁には田んぼの土を漉き込んだ輪島の手漉き和紙、展示棚には能登産のアテ(学名:ヒノキアスナロ)の無垢板を使いました。頭上には新たに三度の拭き漆加工を施した、約100年前の晒し



写真2: ギャラリーわいち外観

天井が広がります。スポットライトがおのおのの作品をやさしく照らし、自然素材にこだわった店内は新鮮で気持ちの良い空間となりました。キャッチフレーズは「うるしはともだち」です。常設は九人の漆作品ですが、それだけではなく、九人が全国各地で出会い、感動を重ねた、職人や作家、アーティストを輪島に呼び込み、展示会、レクチャー、ワークショップ等を開くのです。開店以来、常設展をはじめ、様々な分野の企画展を開催することによって、市内はもとより、県内外より多くの方々がわいちを目ざして輪島に来ていただけるようになりました。作り手たちが自分の創作活動より一歩踏み出して設立したギャラリーわいちが、多くの方々との交流と様々な刺激を受け、情報を発信する「場」となったのです。

これから

従来の産地内での仕事の流れと違う事への反発、圧力をかけられることがあります。また、産地内の「塗師屋」をプロデューサーとして築いてきた強固な産業基盤の分散化を懸念する声もあります。しかし、先人達が行ってきたことは、「良いモノを作りだし、しっかりと伝える、後々のフォローも怠らない」という当たり前の事なのです。これができるのは作り手側と使い手の距離

を近づけることだと思うのです。「やれ売り上げだ！やれ効率だ、利益だ！それ海外へ！」と日本のモノづくりは工業製品だけでなく、手作りの多くも海外に生産拠点が移されています。それを批判するつもりはありませんが、日本の良さ、使うための道具の文化をもっと大切にしていきたいと思います。それには黙って作り続けるだけではなく、作りながら伝えていかなければなりません。産地には伝える人材の育成も必要でしょう。訪ねてくれるお客様に対して「工房案内」や「作り手との交流」などでさりげなくもてなす気持ちも忘れてはいけません。

さて、個人であっても、小さな輪(グループ)であっても、現代の通信手段をうまく使い、こまめに受発信を繰り返すことによって繋がりが全国、世界へ向けてじわりと広がります。これまでは交通が不便な輪島でしたが、それでも多くの方々が訪ねてきてくれました。今年7月に能登空港が開港し、さらに交流が広がる期待が高まりま

す。これまでは全国への「行商」が中心でしたが、地域の良さ知って頂く活動をあわせて「迎商」をあわせて進めていこうと思います。「思い、考え、作り、出会い、交流する。」これを繰り返すことにより、より多くの知識と経験が積み重なります。私たちが作り手は自分が信じた漆器を作り出し、現代生活に少しでも広げることが自身への刺激となります。その刺激が人の輪との繋がりを盛んにし、さらには元気の良い街づくり、産地活性化へとつながっていくのではないのでしょうか。

きりもと たしいち



写真3：輪島工房めぐりの看板